

平成27年度 自己点検・自己評価表

大阪成蹊短期大学附属こみち幼稚園

1. 本学の建学の精神

“桃李不言下自成蹊” とうりものいわざれどしたおのずからこみちをなす

「成蹊」の名称は、中国の司馬遷の『史記』に由来しています。「桃や李^{すもも}は何も言わないが、その美しい花や実^みにひかれて人が集まってくるので木の下には自然と小道（蹊）ができる」という意味です。

徳が高く、尊敬される人物のもとには徳を慕って人々が集まってくるというたとえです。

2. 本園の教育目標

強く 明るく 考える子ども

3歳児 喜んで 幼稚園へ来る子ども

4歳児 友だちと なかよく遊べる子ども

5歳児 力いっぱい 遊びやしごとをする子ども

3. 今年度重点的に取り組む目標

幼稚園教育の基本は環境を通して行う教育であるということ踏まえ、日々の園生活の中で「幼児期にふさわしい生活を展開する」、「遊びを通して総合的な指導を行う」、「幼児一人一人の発達^{たつと}の特性に応じた指導を工夫する」ことを重視して保育活動に取り組んでいく。

そのために、幼児が幼稚園生活の中で満足でき、幼児期にふさわしい毎日を送れるように、教職員は幼児がのびのびと遊ぶ安全で豊かな環境を構成し、思ったことを心ゆくまでやることができる生活を保障していきたいと考えている。更には、一人一人の幼児がもっている個性や発達^{たつと}の特性を見極め、その幼児に合った指導を行うことを大切にしていきたい。一人一人の幼児が自分らしさをもって生き生きとした幼児期が過ごせるよう、十分に自己発揮できる環境づくりと適切な指導を工夫する実践を目標としていきたい。

また、大学・短大との協力体制を強めると共に、関係諸機関との連携を広げながら、各々の専門性を保育に取り入れ、幼児・保護者・教員が、質の高い体験ができる機会をつくり豊かな学びにつなげていきたい。

4. 評価項目の達成及び取り組み状況

評価項目		結果	取り組み状況
I	○保育活動 ・学園の建学の精神や、園の教育目標を踏まえ、特色ある保育を展開する。 ・幼児の発達や育ちの姿にふさわしい生活づくりに努める。	A	・各年齢の発達を理解し、意図的且つ計画的に構成された保育環境の中で、幼児が主体的に活動し、発達に必要な経験を積み重ねていく保育を特色として、本園の教育目標を見据えた保育の在り方を考えてきた。そのことにより、各年齢の幼児が無理なく楽しんで活動に取り組み、気付いたり感じたりしながら、遊びを通した学びを重ねることができた。 ・日々の保育を振り返り、幼児の姿を適切に読み取ること、保育者自身の関わりを見直すことを大切にしていた。幼児の発達については今後も様々な方法で勉強していく必要はあるが、育ちを読み取り明日の保育を考える姿勢をもつことができたと考えている。

II	<p>○教員研修</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園内研修を充実させるとともに、教員一人一人が主体的に保育を考え創造する力をつける。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・研究テーマ「遊び込める子供 ～実践事例を通して幼児が遊び込む要因をさぐる～」をテーマに年間通じて10回の園内研修を実施した。実践事例を書くことで、自らの保育を振り返り課題に気づくことができた。また、教員同士で意見交換をし、研修テーマを意識しながら日々の実践に取り組み、研鑽を重ねていきたい。 ・幼児が遊び込むための環境(人的・物的・時間的など)について、実践事例をもとに教員間で協議を重ねていった。また、年齢ごとの遊び込む姿に繋がったと思われる要因を導き出すための話し合いも深まりつつある。次年度に継続して研修テーマとして取り上げていきたい。
III	<p>○学園や様々な諸機関との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大阪成蹊大学、短期大学との連携を強め、学生保育参加や協力体制をつくる。 ・井高野地域の学校、及び諸機関と連携し、幼児の生活が広がり、豊かな経験ができるよう交流の機会を計画、実施する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・大学、短期大学の学部・学科と連携をとり、運動会・餅つきなど、学生が幼稚園の行事に参加し、準備や実施の手伝いをしたり幼児に関わったりする機会をもった。学生にとっては行事の進め方などを体験したり、幼児を援助することで指導者としての配慮などを学んだりする場となった。次年度は1年間を通して、より計画的に学生と幼稚園が交流できる場を計画していくことを、大学・短期大学教員と考えていきたい。 ・地域の小学校とは、2月に年長児が見学に行き、小学校への進学に期待を膨らませる機会となった。また、中学校のふれあい体験学習では、幼児と中学生が直接関わり合う機会をもつことができた。中学生は幼児について理解を深め、幼児にとっては大きいお兄さん、お姉さんと一緒に遊ぶ楽しさを味わう場になった。同じ地域の中で、子供を育てる学校機関としての交流は今後も大切に繋いでいきたいと考えている。 ・東淀川消防署、東淀川警察署、東淀川子育て支援センター等、地域の機関との連携を通して、幼児の安全教育や幼児と保護者を含めた子育て支援を行なった。そのことにより、園の安全対策を確認するとともに、改善点を見出すことができ、強化することができた。また、子育て支援センターとの連携を通して、幼児の育ちをより深く読み取り、個々に応じた援助について考え、保護者との課題の共有も進めることに繋がった。

5. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

幼児を主体とする保育実践の在り方を、全教職員が常に自身の課題として考え工夫する意欲が高まってきている。それに伴い園内外での保育活動・異校種との交流・保護者連携などもこれまでに比べて、さらに幼児にとって意味ある内容に変化してきている。今後はより様々な関係機関との連携や交流を深め、視野を広げながら、幼児期にふさわしい教育活動を目指していきたい。

6. 今後取り組むべき課題

課題	具体的な取り組み方法
保育の「質」を高める実践	幼児が自ら課題に取り組み、人や物と関わり合いながら考えたり試したりする、そのような環境づくりに努めながら、学びの過程を大切にする保育に取り組んでいく。

<p style="text-align: center;">教員の資質向上</p>	<p>個々の幼児の育ちを的確に読み取り、必要な援助を考える力。幼児が日々生き生きと活動するための、保育環境づくりと保育実践力を高めていく。</p>
<p style="text-align: center;">学内連携の推進</p>	<p>幼児教育学科及び教育学部との連携を密にし、学生にとっての学びの場、幼児にとって様々な人と出会い関わる場、となる体験の機会を計画的に実施する。</p>

7. 学校関係者の評価

各評価項目に対して以下の評価をいただいた。

<Ⅰ について>

教育課程・指導計画、教育目標を踏まえた教育活動が着実になされており、年齢に相応しいきめ細やかな指導が行なわれていることは、今後も継続をしてほしい。

<Ⅱ について>

教員間で意見交換がされることで、より保育が向上すると感じた。幼児が遊びに没頭することで、社会性や創造性が育まれていることが理解できた。

<Ⅲ について>

学園、地域など、世代間交流によって貴重な体験ができており、人を思いやる心が育まれていることがわかった。

<その他>

幼児が安心して過ごせるよう、今後も学園・地域と協力しながら、こみち幼稚園らしい保育の実践を期待したい。

総合的な評価においても、概ね良好であり、今後も一層の充実を期待する旨のご意見をいただいた。